

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

《人社系》

●大阪大学経済学研究科経営学系専攻

「イノベーションリーダー養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムでは、東大阪地域における中小企業へのインターンシップを充実・発展させたかった。しかしながら、ニッチ分野で活躍する多くの中小企業の事業領域に対して興味を覚える学生が意外と少なく、また、技術系学生（工学修士取得者）は、1年間でMBAを取得する必要があることから時間的な余裕も少なかったため、期待していたような成果が上げられなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

具体的な要因としては、中小企業の積極的な紹介と学生ニーズの徹底した把握（修学スケジュールも含め）が上げられるが、こうした副次的な事務作業をこなすための組織が、予算的にも人員的にも不十分であった、と言わざるを得ない。しかしながら、予算があったからと言って特任教員という不安定な身分での雇用を行えたかについては、疑問が残るところである。また、イノベーションリーダー人材養成という主たるミッションの達成からすれば、それほど悪影響を及ぼしているとも思い難い。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

中小企業へのインターンシップの実施が難しい状況で、代替的に実施したことは、社長講演会を毎年実施したことであった。異なる業種の異なるビジネスモデルをもとに、その個性と多様性を講演を通じて知ることによって、ビジネス現場におけるリアリティは学生たちの間で高まったと思われる。

●奈良女子大学人間文化研究科国際社会文化学専攻、社会生活環境学専攻

「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ・本プログラムでは、広くさまざまな職場を訪問し、見学・質疑応答などを通じて大学院生にキャリア形成について考えさせるインターンシップ実習のほかに、より専門性に基づいたインターンシップ専門実習を開設した。しかし、本プログラムが複数の専攻を対象として実施されたこともあり、実に多様な専門分野からなっていたため、それらの全ての分野に十分に対応できるだけの専門的なインターンシップの場を確保することは困難

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

であった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ・本プログラムが人社系の複数の専攻を対象として実施されたこともあり、実に多様な専門分野からなっていたため、必ずしもそれらの各専門分野の大学院生のニーズに応えるだけの多様な専門的実習の場を設けることができなかった。受講生へのアンケート結果によると、総じて高く評価されている中で、「社会に出てから直接・間接的に役に立つ内容であったか」という設問に否定的な回答が散見されたことは、他に適当なインターンシップ実習がないために、大学院生が必ずしも自らのニーズにはマッチしない可能性を感じつつ受講したことが考えられる。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

- ・大学院生のニーズの把握には努めたが、インターンシップ専門実習の場に関するニーズの把握が必ずしも十分ではなかった。また実習の場として公的機関だけではなく、民間企業の理解と協力がより一層必要と思われる。一般に、人社系の大学教員は企業との接点が乏しく、情報交換や関係構築が不十分であるので、この点に関して教員個人だけではなく大学としても改善のための工夫が必要であろう。

●立命館大学国際関係研究科国際関係学専攻

「国際協力の即戦力となる人材育成プログラム」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

これまで研究科で取組んできたインターンシップの充実を図るとともに、2009年度からは、「フィールド・リサーチ」を開講し、院生が紛争後地域に赴いて学ぶことのできる仕組づくりを行った。

これらの取り組みは、参加者にとっては、そのキャリア形成や研究推進に非常に有効であったといえるが、参加者が限定される傾向があった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

インターンシップ、フィールド・リサーチとも、海外において実習や研究を行う際の経済的な負担が非常に大きく、経済的に余裕のない院生が参加しづらかったこと、それぞれの院生のキャリア形成や研究計画に添って柔軟に実習・研究実施先を選択することが難しかったことなどが要因として考えられる。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

これらの課題に対応するため、プログラム終了後の2011年度より、「フィールド・リサーチ」を新展開（フィールドリサーチ初心者にも対応できるように丁寧な講義や実習を実施）するとともに、「フィールド型学修・研究推進制度」を新たに設けて、院生の海外における個別の研修・実習の支援を行った。この結果、2011年度から、フィールド・リサーチへの参加者が増加した。

インターンシップについては、量的な拡大だけに注目するのではなく、事前研修等を整備して、院生がそのキャリア形成・研究計画と、インターンシップ実習とのかかわりを十分に検討できるような支援を開始した。

《理工農系》

●東京大学情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻

「大学連携によるICTリーダーシップ教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムでインターンシップを単位と認める機会を学生に提供し、それによって実施されたインターンシップは相当数あったものの、それらの多くのインターンシップは学生が指導教員との協力関係のもとで見つけてきたものが多く、本プログラムとして提供したインターンシップの機会は十分とは言えなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

従来、インターンシップの機会の多くは学生と指導教員との協力関係の元で提供されることが多く、また企業からのインターンシップの可能性についての照会は大学ではなく研究室に行くことが多い。それにより幅広いインターンシップ機会の収集と、それに関わり合いたい学生のマッチングを実現できなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

教員に対してインターンシップ機会の提供や情報共有を幅広く求めたのだが、それらの機会はそれぞれの教員の研究室の学生に割り当てられることが多く、本プログラムとしては十分な機会を提供できなかった。相当数のインターンシップが実施されたとはいえ、学内でインターンシップの機会を探す方法が誤っていたのかもしれない、学外の企業に対して幅広くインターンシップの機会を求めるべきであったかもしれない。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

●東京工業大学情報理工学研究科情報環境学専攻

「PBLと論文研究を協調させた教育の実践」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

博士課程においてはインターンシップを必修化しようとしているが、受け入れ企業の発掘、特に海外の企業の発掘には困難が伴う。

一方、一旦実績が構築されると、その継続は比較的容易であるが、学生が常にその企業でのインターンシップを希望するとは限らないなど、マッチングにはある程度のボリュームの中での調整が望まれる。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

実績作りの困難さということであり、広い産業分野へのインターンシップのメニューが提供できなかったことである。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

回避する策として、海外の大学と学生の交換留学によるインターンシップを計測し、相手先大学におけるプロジェクトに参画させる対応を採用した。

●豊田工業大学工学研究科

「実学の積極的導入による先端的工学教育」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本学では、国際社会でリーダーとして活躍し、新しい産業を創生しうる人材育成を目指している。そのために、本取組では、従来の座学中心(受け身教育)を改め、基礎教育とのバランスを保ちつつ、プラクティス・ベースド・アクティブ・ラーニング(PBAL)科目を導入した新しいカリキュラムを構築し、その大きな柱として本学大学院で初めて「修士学外実習」を導入した。計画段階では「必修」の位置付けとしたが、学内での議論・調整の結果、必修とすることは困難であると判断し、最終的には「選択」科目とした。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

- ・国内外の実習派遣先開拓が全学生分確保できない
- ・派遣先と学生のレベルとのマッチング(特に海外実習)により、希望学生すべてを派遣することは困難であり、必修科目にはできなくなった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

- ・国内外の実習派遣先開拓は、指導教員の他、本取組委員会が積極的に関与した。
- ・派遣先と学生のレベルとのマッチングを考慮すると派遣できる学生に制限があることが判明した。
- ・海外派遣学生については、英語学習のフォローアップを行うことが必要（現在はネイティブによる指導を事前に行うようにしている）

《医療系》

●長崎大学国際健康開発研究科国際健康開発専攻

「国際保健分野特化型の公衆衛生学修士コース」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

2年次に学生は8ヶ月間のインターンシップと課題研究を開発途上国で実施する。国によって異なるが、学生に安全な勉学・生活環境を与えなければならない。また学生のインターンと研究を行う上での経済的負担を少なくしてやるべきである。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

長期インターンシップにおいては、学生が渡航する先での、勉学・生活の安全性や危機管理と、渡航費を含む学生の経済的負担に関する心配が常に存在する。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

GP 支援により学生が安全な生活環境の基にインターンと課題研究を行えた。また、渡航前オリエンテーションの充実、派遣機関におけるメンターの配置、学生から大学への月例報告提出に加え学生派遣先への教員訪問等による密なコミュニケーションを行うなど、海外滞在中の学生の安全の確保は常にプログラムの最重要事項の一つとして位置づけられている。今後も海外での学生の長期にわたるインターンシップには、旅費と安全が確保できる宿舍費の支援など、生活費の一部の支援が不可欠である。

●沖縄県立看護大学保健看護学研究科保健看護学専攻

「島嶼看護の高度実践指導者の育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

国外からの招聘講師や海外実習・研修の調整、さらに資料の翻訳や実習計画書の英語での指導など、バイリンガルの限られた教員体制で行うことはかなりの教員の負担があった。さらに学生自身の英語力の短期的な向上はあまり期待できないので、海外実習時の英語でのコミュニケーションや国際学会時での参加準備などを含め、長期的な視点での英語の能

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

力向上を目指した教育体制の構築が必要である。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

これまで海外からの招聘講師による講演会の開催は実施してきたが規模が小さく、単発であったため随時の対応ですませていた。しかし、今回のプログラムでは未知の領域である島嶼看護に関する海外の専門家による新たな科目「国際島嶼看護論」やアジア太平洋地域での島嶼看護の実習が義務づけられていたため、その開拓にかなりの努力を要した。一部の教員でしか役割の遂行ができなかったため、負担が集中したことも原因になっている。学生自身も英語に堪能な学生ではなかったため、実習なども2年間にわたり同じ教員が通訳者として引率するなどの必要性が生じた。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

未知の領域である島嶼看護に関する海外の専門家の抽出や招聘に関しては、リモート看護教育に優れている豪州やカナダの著名な学会や太平洋島嶼看護リーダー会議に教員自身が参加し、直接その場で交渉して、招聘講師の依頼や実習の可能性などを交渉した。こちらの教育プログラムの趣旨を説明することで、多大なる賛同を得ることができたのは非常に幸運であった。人的資源や人的交流が皆無のなかでの展開ではあったが、多くの方々の支援を得て、本大学に著名な専門家の招聘や海外実習が可能になった。今後は、国内のみでなく、海外での研修や研究の機会を作ることで、人的ネットワークが構築されるので、短期間ではあったが本事業で構築した人的関係性を継続しながら国際交流を進めていくことが課題である。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例《非公表プログラムの事例》
- D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
- ①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

《非公表プログラムの事例》

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

●事例 8

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

各プロジェクトごとに学外の連携組織との協議によりインターンシップを連動して履修できるようにカリキュラムを組んでいるが、安全管理などの観点からインターンシップ協定書の締結を前提としつつも、締結に至らなかった事例がみられた。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

学外連携組織における責任範囲にインターンシップの受け入れを想定していない場合が見られ、大学における共同研究の方に関心が向けられていることが伺われたが、協定書の締結に至らずとも実質的にインターンシップを受け入れた組織が多く、プロジェクトの実施内容への影響は見られなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

各研究プロジェクトごとに学外連携組織と指導担当教員及び参加登録学生が緊密に協議を重ねて信頼関係を築くことができれば、インターンシップの実施そのものに影響が及ぶことはないが、学外組織側の認識を深めていくために、本活動プログラムの成果並びに教育効果を広く社会に伝えていくことが重要であると認識している。

●事例 9

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

学生が自分の研究に照らし合わせて派遣先を決める形のインターンシップを実施した。企業、研究機関を含む他機関へのインターンシップは数にしてプログラム以前の10倍程度に増えた。その一方でインターンシップの効果を測定することは困難であった。

(苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

インターンシップ派遣について事前の申請書、事後の報告書、派遣先機関の実施報告書を義務付け、インターンシップにより得られた研究成果等も報告させていたが、インターンをしなければ得られない成果なのかどうかを判定する基準を明確にできなかった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例《非公表プログラムの事例》
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

インターンの効果を十分検証できなかったため、効果の有無をその後のインターンシップ派遣の審査に生かすことができなかった。

書面での審査だけでなく、担当教員が派遣先に出向くなど派遣先での業務内容を把握する手段を検討すべきであった。

●事例 10

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

本プログラムでは企業でのインターンシップは計画されなかったが、企業人による講演の機会は数多くもたれた。大学院で学んでおくこと、倫理なども含めて、大学人からは聞けない話を聞く機会となった。一方でその理解度には課題を残した。また公開型の講演会に選ばれた院生を講師としたが、この経験をすべての院生に一般化するのはやはり困難であった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

教育で産業界や地域社会にあまり負担をかけてはいけないという意識があった。本プログラムではわれわれの力量を計算した結果、企業派遣には基本的に取りくまなかったが、その分、外部講師による講演会でより活発な質疑応答を促す努力が必要であったと思われる。また公開型の講演会をより広範囲の院生に広げることは困難であり、小規模の公開セミナーの開催の効用も検証すべきであった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

外部との連携の問題は、教員と外部との折衝の機会を多く持つことがまず肝要と考える。それにより、相互で教育プログラムを立ち上げられたら理想的といえる。インターンシップ的でありつつも短期間で教育効果を上げることの出来る方策をこのプログラムの中で研究していくべきであったかもしれない。その意味で、運営委員に発想の柔軟な若手教員をより多く入れる方策もあったのではないかと振り返っている。

●事例 11

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

- ①地元自治体とのフォーラム共催、地域経済団体とのフォーラム共催、技術セミナーの実施や大学施設見学会の開催。地域連携・貢献に消極的な教員の説得が困難であった。
- ②継続してインターンシップの受け入れを協力いただける企業を開拓した。リーマンショ

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例《非公表プログラムの事例》
D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化
①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

ックの影響などで、協力いただける企業が少なく、合わせて学生の顕著な大企業志向と、教育としての「インターンシップ」への誤解（インターンシップに行ったらそこに就職しなくてはいけないという勘違い）があった。

（苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか）

- ①学生同様に「大手企業」志向の教員が多く、トップシェアやオンリーワン技術を持っていても規模が「中小企業」というだけで、コミュニケーションに消極的なため、産学連携のメリットや、大学の地域貢献の重要性を何度も繰り返して説いた。フォーラムやセミナーの実施により、少しずつ改善していった。地域企業を育成する良いチャンスではあったが、企業とのコラボレーションに関心のある教員が多くないことが理解できた。
- ②インターンシップの受け入れ先開拓は、企業側にメリットが少ないためか、教育的効果への理解はあっても、交渉がうまくいくことの方が少なかった。このような点は、地元自治体は理解していたようである。

（どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか）

- ①地元自治体とのフォーラム共催、地域経済団体とのフォーラム共催などをきっかけに、地元企業側から、敷居が高いという印象を持たれていたのを改善し、コミュニケーションを積極的に図り、技術のアドバイスや、共同研究などが広がった。
- ②教員の個人ネットワークを活用して、継続してインターンシップの受け入れを協力いただける企業を開拓した。産業界が我が国の将来を担う人材育成のためとして、もっと積極的にインターンシップを協力する姿勢を期待している。
- ③地域企業とのインターンシップには教員の努力が必要で、教員の意識がまだそこまでいていないと考える。